



CT スキャンの画像からは、レントゲンでは見逃しがちな様々な症状がはっきりと読みとれるのだ。

「うちに来る前に別の病院を受診したそうなのですが、そこでは見つけることができなかったようです。レントゲンの左右に違いがあるのが、わかりますか？」
素人の目から見ても、右側が全体に白っぽくなっているのがわかる。これは、内臓から出血しているためだという。

トゲンは、立体的な体内を2次元の平面で映し出すものなので、見逃しが多いため、獣医師がベテランかどうかで、読み取れる情報量が圧倒的に違ってくるので、CTはしっかりと3次元の状態で撮影される。誰が見ても見逃しが少ないのです」
しかし実際には、CTを導入している動物病院はさほど多くない。なぜなのか。

「導入のために数千万円というコストがかかる。そしてもう一つ、CTを撮るためには全身麻酔が必要になるのですが、この全身麻酔に対する獣医師の拒否反応があると思います。導入している動物病院はさほど多くない。なぜなのか。」
「導入のために数千万円というコストがかかる。そしてもう一つ、CTを撮るために全身麻酔が必要になるのですが、この全身麻酔に対する獣医師の拒否反応があると思います。」

獣医療業界の革命児、 個人病院トップクラスの 設備を武器に、 日本獣医療全体の質の向上を目指す



Elms Pet Clinic
エルムスペットクリニック

Doctor
早田 明

「人間が、椎間板ヘルニアを発症し、足が麻痺してしまったような場合、ステロイドを飲んで調子を見ましよう、という治療だけで済ませますか？ まずはMRIで、椎骨のどの部分なのか、圧迫ほどの程度なのかを調べてから治療方針を決めるでしょう。ところが動物の事となると、足が麻痺している状況であつても『薬で様子を見ましよう』というところで終わりにされてしまうことが少なくない」
エルムスペットクリニックの早田明院長は、動物医療の現状をそう語る。

「腫瘍などの症例に対しては、CTを撮ることもせずいきなり手術、という事があまりにも多い。切つてみる、人間でいうと、あちこちに転移していたことがわかったりする。これが事前にわかっていたら手術していたでしょう。実際に目で見えたところだけ切除しても意味がないわけですから。少なくとも、手術に臨む前に飼い主さんが知っておいた方がよい情報だつたはずで、転移の有無。人間であれば当然すべき検査が、動物医療においては行われていない、科学的なエビデンスの重要性が認識されていないのが現状なのです」

「人間が、椎間板ヘルニアを発症し、足が麻痺してしまつたような場合、ステロイドを飲んで調子を見ましよう、という治療だけで済ませますか？ まずはMRIで、椎骨のどの部分なのか、圧迫ほどの程度なのかを調べてから治療方針を決めるでしょう。ところが動物の事となると、足が麻痺している状況であつても『薬で様子を見ましよう』というところで終わりにされてしまうことが少なくない」
エルムスペットクリニックの早田明院長は、動物医療の現状をそう語る。

「人間が、椎間板ヘルニアを発症し、足が麻痺してしまつたような場合、ステロイドを飲んで調子を見ましよう、という治療だけで済ませますか？ まずはMRIで、椎骨のどの部分なのか、圧迫ほどの程度なのかを調べてから治療方針を決めるでしょう。ところが動物の事となると、足が麻痺している状況であつても『薬で様子を見ましよう』というところで終わりにされてしまうことが少なくない」
エルムスペットクリニックの早田明院長は、動物医療の現状をそう語る。

麻酔のリスクと

CT検査をしないリスク

早田さんが、ある犬のCTスキャンの画像を見せてくれた。

「人間が、椎間板ヘルニアを発症し、足が麻痺してしまつたような場合、ステロイドを飲んで調子を見ましよう、という治療だけで済ませますか？ まずはMRIで、椎骨のどの部分なのか、圧迫ほどの程度なのかを調べてから治療方針を決めるでしょう。ところが動物の事となると、足が麻痺している状況であつても『薬で様子を見ましよう』というところで終わりにされてしまうことが少なくない」
エルムスペットクリニックの早田明院長は、動物医療の現状をそう語る。

科学的な検査に支えられ ヘルニア完治率9割

早田さんは、数年前、「キヤミツク」という犬猫用の動物検診センターの設立に奔走した経験を持つ。

個人の病院がCTやMRIの装置を導入するのは大きな負担ですし、慣れていなければ使いこなすことも

できない。それならば、CTやMRIを備えた検診センターを立ち上げ、個々の動物病院に活用してもらえばよい、と考えたのです」

センター立ち上げ後、早田さんは自ら、動物病院に営業して回った。しかし、治療の質を上げようという熱意のある獣医師の少なさに、啞然としたという。

「当時は、わざわざ新しいことに挑戦したくない、という反応が大半でした。僕が考える、いい獣医師とは、飼い主さんが納得できるだけの必要な情報を提供してきちんと理解してもらった上で、飼い主さんとともに治療の方針を決定できる人。その場合の必要な情報とは、検査によって得られたエビ

デンスに基づくべきです。しかし現状は、そうした検査を行わなくても、咎められることはありません」

科学的な検査によって裏付けられた情報をもとに、獣医師と飼い主が治療の方針を決定していく。人間の世界では当たり前の、そうした医療のあり方を、早田さんは動物の医療においても追求し続けている。その結果、椎間板ヘルニアの回復率が、早田さんのクリニックにおいては実に9割（グレード4まで）。エビデンスに基づいた的確な治療の成果といえよう。

「今後は、症状が現れてから検査するのではなく、早期発見のための検査の重要性を積極的に説明してい

たいと考えています。人間ドックのようなものを提案していきたいのです」

小さな動物たちは、病気の進行も早い。ちよつとした病気のサインを見逃すと、それこそ命取り。だからこそ、機器を活用して可能な限り早期に見つけて手を打ちたい。安定した経営を最優先しがちな獣医師が多い中、ある程度のリスクは覚悟の上で、次々と新たな挑戦を続ける早田さん。

「適当にやっても非難されないのだから、ぼちぼちやっ

て、それなりに儲けて…、というような発想は僕にはありません。海外の動物医療の現場なども積極的に見学し、よいものは取り入れ、変えるべき現状はどんどん



MRI 画像の精度は高く、小型犬の関節もクリアに見える。



変えていくべきだと考えています。そうすることで初めて、勉強せず努力しない獣医師は淘汰され、日本の獣医療の質も向上していくだろうと思っています」

伝説名馬の産みの親、早田光一郎氏が語る、早田家の情熱的DNA

1979年、北海道日高にある資生園早田牧場の長男として、早田明猷医師は生を受けた。祖父から三代続いて獣医師を輩出する早田家。早田明氏は獣医師としての姿勢を父から学んだというが、その父とは早田牧場の元

経営者であり、実は、かの有名な三冠馬ナリタブライアンの育成で一世を風靡した早田光一郎氏である。このたび、光一郎氏にお話を伺う機会をいただいた。息子で獣医師の早田明氏について、そして、早田牧場で培われた哲学について…。

早田光一郎氏は福島の一牧場に過ぎなかった早田牧場を、全盛期には日本を代表する設備と生産実績を誇る大牧場へと成長させた。ブライアンズタイムの買い付けに見られる直観力と、アウトブリードを重視する独自の哲学によって、ついには三冠馬を生み出し、競馬界の常識を変えた伝説の人物だ。光一郎氏は言う。「生産から調教まで一貫

方式を導入することで、既存の業界に挑んだつもりです。私は速い馬を作ることに人生の全てを賭けてきました。何を犠牲にしても、速い馬を世に送り出したかった。三冠馬ナリタブライアンはその結晶です。

息子を見てみると、若いころの私を見ているような気がします。息子の場合、情熱の対象が『日本の獣医療をよりよいものにしていきたい』ということなのだろう、と。

そのために、検診センターを立ち上げ、獣医師の意識改革にも取り組み、自らも最高の機材を揃えて前進を続ける。理想を



※早田牧場とは
1917年早田傳之助氏によって福島県に設立。77年北海道新冠郡に新冠支場が設立され、代表種牡馬ブライアンズタイム産駒であるピワハヤヒデとナリタブライアンの兄弟を輩出して日本を代表する牧場へと駆け上がるも、2002年に閉鎖した。代表的な生産馬はマーベラスクラウン、ナリタブライアン、シルクジャスティス、シルクブリアードンナなど